

オーディオ実験室収載

スピーカーアキュライザーの導入(27) —アナログ対デジタル(12)—

1. 始めに

前報(26)に引き続き、アナログ音源とデジタル音源の比較を行ってみます。

2. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続条件を前報(14)のとおり替えています。

試聴音源はマーラーの交響曲1番に固定し、アナログ盤、CD、ベルリンフィルデジタルコンサートホール、CONCERTGEBOUWORKEST、STAGE+から選択します。

アナログ盤

Warner PIONEER H-10002V

Harold Farberman 指揮 ロンドンシンフォニーオーケストラ

LONDON SLC 1788

ゲオルグ・ショルティ 指揮 ロンドンシンフォニーオーケストラ

EMI EAC-55004

カルロ・マリア・ジュリーニ 指揮 シカゴシンフォニーオーケストラ

CD

EXTON EXCL-00085

エリアフ・インパル 指揮 チェコフィル

PHILIPS 422 329-2

小沢征爾 指揮 ボストンシンフォニーオーケストラ

EXTON EXCL-00034

サカリ・オラモ 指揮 ロイヤルストックホルムフィルハーモニー

ドイツグラモフォン UCCG-50013

クラウディオ・アバド 指揮 ベルリンフィル

WS-001

ファビオ・ルイージ 指揮 ウイーン交響楽団

ベルリンフィルデジタルコンサートホール (BPODCH)

イヴァン・フィッシャー 指揮 ベルリンフィル

アンドリス・ネルソンス 指揮 ベルリンフィル

ダニエル・ハーディング 指揮 ベルリンフィル

CONCERTGEBOUWORKEST

マリス・ヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

ダニエル・ハーディング指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

STAGE+

レナード・バーンスタイン指揮ウイーンフィル

グスターボ・ドゥダメル指揮ロスアンゼルスフィルハーモニー

ラファエル・クーベリック指揮バイエルン放送交響楽団

3. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴結果

アナログ盤はLP-12、CDはEMT981、ベルリンフィルデジタルコンサートホールはPC、CONCERTGEBOUWORKESTはPC、STAGE+はPC経由でそれぞれ再生します。

Farberman 指揮ロンドンシンフォニーオーケストラのアナログ盤は、1979年のデジタル録音です。盤質はよくありませんが、ゆったりとしたテンポでふくらみのある穏やかな音です。

ショルティ指揮ロンドンシンフォニーオーケストラのアナログ盤は、1969年の発売です。Farberman 盤とオーケストラが同じで、レーベル違い、指揮者違いでどうなるかに興味がありましたが、ショルティらしく音量のダイナミックレンジが大きく、切れの良い盛り上がりの迫力があります。

ジュリーニ指揮シカゴシンフォニーオーケストラのアナログ盤は、1971年の録音です。盤質はあまりよくありませんが、ジュリーニがゆったりと流麗な表情を作っていきます。盛り上がるのところでも、過度の緊張感はなく、緻密な表現で盛り上げていきます。

インパル指揮チェコフィルのCDは、2011年の録音です。プラハのドボルザークホールでの録音であり、インパル得意のマーラーで、チェコフィルの弦や木管の響きも美しく、迫力ある演奏です。

小沢征爾指揮ボストンシンフォニーオーケストラのCDは、1987年の録音です。バランスがとれた中庸の演奏で、全体的にウオームな音調ですが、もう少しメリハリが欲しいところです。

オラモ指揮ロイヤルストックホルムフィルハーモニーのCDは、ロイヤルストックホルムフィルハーモニーの演奏会で買い求めてきたもので、2009年の録音です。クリアーでエッジの効いた音で、力で押してくるような演奏です。演奏会でも音量の大きいのに驚かされたことを覚えています。

アバド指揮ベルリンフィルのCDは、1989年のライブ録音です。演奏は極めてオーソドックス、かつ緻密な表現で、弱音から盛り上がりの迫力までバランスが取れています。

ルイーゼ指揮ウィーン交響楽団の CD は、ウィーン交響楽団の演奏会で買い求めてきたもので、2012年のスタジオ録音です。ややゆったりとしたテンポで丁寧な演奏です。ソフトでありながらディテールの再現も十分です。

フィッシャー指揮ベルリンフィルの BPODCH は、2022年の収録で、いつもながらの淡々としたフィッシャーの指揮ですが、要所を抑え、ディテールの再現も十分で、各パートの奏者の演奏技量まで分かるようです。

ネルソンス指揮ベルリンフィルの BPODCH は、コロナ禍の2020年の収録とあって奏者間に距離をとり、無観客での演奏です。ネルソンスの指揮で小刻みながらゆったりとしたテンポで始まり、音質的にはフィッシャー指揮ベルリンフィルと同様でディテールの再現も十分ですが、奏者間の距離のせい、音の密度感は後退しています。

ハーディング指揮ベルリンフィルの BPODCH は、2019年の収録です。ハーディングの端正で折り目正しい指揮の下、ディテールの再現も十分で、緻密でバランスの取れた演奏です。

ヤンソンス指揮コンセルトヘボウの CONCERTGEBOUWORKEST は、2013年の収録です。最新の収録ではありませんが、コンセルトヘボウの音響特性のおかげで、音の分離もよく、弦や木管も美しく響いています。ヤンソンスは常任指揮者であっただけにコンセルトヘボウとの息もあっています。このホールの収録配信はグランカッサやコントラバスの明瞭さが特徴です。

ハーディング指揮コンセルトヘボウの CONCERTGEBOUWORKEST は、2009年の収録です。演奏も音質もヤンソンス指揮の演奏とよく似ていますが、ハーディングの端正な指揮の下、若干ソフトタッチの演奏のように聴き取れます。

バーンスタイン指揮ウィーンフィルの STAGE+は、1974年の映像付きの収録で、おそらく TV 用とかのアナログ収録からデジタル化されたものと思われます。解像度などは最新の収録のようにはいきませんが、バーンスタインの切れのよい指揮とウィーンフィルの弦のビロードのような感触が伺えますし、楽友会館大ホールの中低域の厚みが聴き取れます。

ドゥダメル指揮ロスアンゼルスフィルハーモニーの STAGE+は、ライブ収録との記載があります。録音年月日は不明ですが、比較的最近の収録と思われます。音質はクリアで、若いドゥダメルの指揮の下、ロスアンゼルスフィルハーモニーらしい勢いのある演奏です。弱音部の繊細な表現は今一つですが、盛り上がりの迫力やグランカッサの音量の大きさが特筆ものです。

クーベリック指揮バイエルン放送交響楽団の STAGE+は、マーラーの交響曲の全集の中から1番を選んで再生しました。ドゥダメル指揮ロスアンゼルスフィルハーモニーの STAGE+と違って、弦や木管の弱音の表情が美しく、オーケストラの各パートのバランスがとれたオーソドックスな演奏で、盛り上がりの際の緻密な表現も十

分で音質全般も CD に劣りません。

4. まとめ

収録年代と音源の種類と再生ルートが異なる音源が、一様にスピーカーアキュライザー導入以降、音質が向上し、アナログや STAGE+ の古い音源もフレッシュな印象で聴けるようになっていきますし、STAGE+ の音源もアナログや CD に迫る音質で聴けるようになっていきます。今回は、フォーマット違いの多くの演奏を聴いたわけですが、演奏スタイルや音質の違いがよく分かるようになっていきます。

以上